

仏心と葬弁儀

―その4―

心で結ばれた社員たちとの運営

開業して丸一年、待ちに待っていた初仕事である葬儀第一号は、後に社員となった友人の協力によって無事、滞りなく終えることができました。すでに創業から一年を迎えるところで、飛田が二十六歳の時でした。

「祭壇など、葬儀の道具はすべて新しかったですし、無事に役目を終えた時の感動は、今でも忘れることができませぬ」と、今も当時をよく懐かしみます。

そんな初仕事呼び水となつてか、葬儀依頼はしだいに増えていきました。その丁寧な、いわば遺族の立場に立った心配りが、依頼者からの口コミによって広がったこともあってか、「丸和堂に任せれば大丈夫だ」という評判が生まれ、次々と仕事の依頼が舞い込むようになっていったのでした。

「仏縁・奇縁という言葉があるように、たとえ日常の人間関係が生き馬の目を抜くようなシビアなものであつても、不幸の時に生まれた出会い、まるで因縁のように人と人を強く結びつけることがあるようです」と飛田は語ります。

苦しい時こそ努力と奉仕を

開業して間もないころから、丸和堂にもたった一人だけ従業員がいました。当時まだ二十一歳の青年でしたが、飛田自身、仕事を教えようにも自分自身ズブの素人であつたために教えようもなく、仕方なく彼を札幌や東京へ出張させ、勉強させたのです。先輩同業者の仕事ぶりを観察するのがいちばんの勉強なのですが、新米業者であることが知られている地元でおこなうわけにはいかないからです。

「出張先で新聞の死亡広告を見て、葬儀場に行くのです。しかし、いくら都会でも見ず知らずの人間が葬儀に参列できるものではありません。正面から入るわけにはいかないのです、関係者に頼み込んで、裏口からこっそりと見学させてもらうのが普通でした」と飛田は話します。まさに社長も従業員も、ともに手探りで独学だけの経営勉強でした。飛田は今も、その当時に記した見学報告のメモを大切に保管していて、時折取り出しては初心を忘れぬための戒めとして読み返すことがあります。

つづく

■次回の掲載は十月二〇日(土)を予定しております。